第3回演奏会

リレーション'70

Flute **野口龍，永井由比**　Violin **三瀬俊吾**　Piano **大須賀かおり**　Electronics **有馬純寿**
-ゲスト-

2014. 6. 27(金)
19:00 開演

東京オペラシティ・リサイタルホール
TOKYO OPERA CITY RECITAL HALL

協力：ジパングプロダクツ株式会社
後援：日本現代音楽協会

ご挨拶

本日は、リレーション '70 第 3 回演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

1970 年から 1979 年まで活動した「室内楽 '70」(Fl. 野口龍、Vn. 植木三郎、Pf. 若杉弘、後に松谷翠)は、邦人作曲家へ計 20 作品の委嘱を果たし、日本の現代音楽の礎を築きました。「リレーション '70」は、「室内楽 '70」の全委嘱作品の再演を目的に結成致しました。全4回シリーズの演奏会は、今回が第 3 回目になります。次回の第 4 回(2015 年 3 月 27 日)で今回の演奏会シリーズは最終回を迎えますが、次の企画も構想中です。次回の演奏会で皆様にお知らせできることと思います。

今回の演奏会では、柴田南雄氏の≪トリムルティ≫の演奏に際し、有馬純寿氏をゲストにお迎え致します。≪トリムルティ≫はエレクトロニクスだけでなく、様々な楽器を演奏する大掛かりな作品です。演奏の準備に時間が必要となりますので、予めご了承いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。また、≪トリムルティ≫の楽譜の一部のコピーを、「室内楽 '70」の資料と共にロビーにて展示致します。どうぞ是非ご覧くださいませ。今回の委嘱新作は、幅広くご活躍を続けておられます、渡辺俊哉氏にお願い致しました。そして、第 4 回の最後を飾る新作は、パリで研鑽中の注目の若手作曲家の北爪裕道氏に委嘱致します。

「リレーション '70」の活動も未来へ受け継がれていくことを、メンバー一同願っております。最後までどうぞごゆっくりお楽しみくださいませ。

リレーション '70 一同
野口 龍
永井由比
三瀬俊吾
大須賀かおり

Program

三善晃　オマージュ I (Fl. 野口龍)

廣瀬量平　フルートとヴァイオリンとピアノのための「ピエタ」(Fl. 野口龍)

柴田南雄　トリムルティ (Fl. 永井由比 / Pf.Cemb.Per. 大須賀かおり / Electronics. 有馬純寿)

- 休憩 -

入野義朗　H.R.S. のためのトリオ '70 (Fl. 野口龍 / Cemb.Celesta 大須賀かおり)

渡辺俊哉　流跡線(委嘱新作)(Fl. 永井由比)

八村義夫　エリキサ (Fl. 永井由比)

野田暉行　バラード (Fl. 永井由比)

※このコンサートはサントリー芸術財団の推薦コンサートです。
また、ジパングプロダクツ株式会社の協力のもと、ライブ録音を行います。

Program Note

三善晃 オマージュ I

1970年、「室内楽'70」の発足に当って三善晃さんから贈っていただいた、つまりわれわれが第1回演奏会の開幕に演奏した曲です。われわれの演奏会の開幕には、どうしてもこの曲を演奏したくなってしまうのです。
（1978年7月5日・青山タワーホール・室内楽'70第8回演奏会、プログラムより）

三善晃（1933～2013）
3歳の頃からピアノ、ソルフェージュ、作曲を学び、小学校に入った頃から作曲とヴァイオリンを習う。1951年東京大学文学部仏文科に入学。第22回日本音楽コンクール作曲部門第1位。1955年パリ音楽院に留学、アンリ・シャラン、レイモン・ガロワ・モンブランに師事。アンリ・デュティーユの影響も受ける。1957年帰国、東京大学に復学し1960年に卒業。作品は管弦楽、室内楽、歌曲などのほか、多くの合唱曲がある。1974年～95年まで桐朋学園大学学長を務める。1999年12月芸術院会員となり、2001年11月文化功労者に選ばれる。

廣瀬量平 フルートとヴァイオリンとピアノのための「ピエタ」

母マリアが血にぬれたキリストの死体をその膝にのせて嘆くシーンはキリスト教世界においてくり返し画かれ、造形されて来た。それは宗教画であると共に、結局いつの時代でも、その時代の「悲惨さ」の表現であったように思う。
今度作曲したこの曲に私が何故この《ピエタ》という題をつけようと思ったのか、実は自分でもよくわからない。キリスト教的な信仰告白とかかわりないことだけはたしかなのだが……。
フルート、ヴァイオリン、ピアノという、あまり日常的でない楽器編成、そしてどちらかといえばサロン的ですらあるこの楽器の組み合わせをあたえられ、もしかすると私は、それにふさわしくない発想をえらんだのかもしれない。出来うべくば今回は軽快なディベルティメントをこそ書きたかったのに、出来てみるとそれは私のはじめの希望とはちがっていた。そしてそれを私は《ピエタ》としか名づけることが出来なかったのである。
（1979年11月12日・草月ホール・室内楽'70第10回演奏会、プログラムより）

廣瀬量平（1930～2008）
北海道大学教育学部卒業後、東京藝術大学作曲科へ入学し、池内友次郎（1906-91）や島岡譲（1926-）らに師事。在学中は専ら作品研究や作曲技術の習得に励むが、専攻科修了後に劇音楽で尺八や三味線に初めて触れたのを契機に、邦楽への関心が高まる。とりわけ尺八に大きな可能性を見出し、《尺八と弦楽器のためのコンポジション「霹靂（へき）」》（1964）などを創作。邦楽器としての楽器の扱いを保ちつつ、西洋の響きと融合させることを試みた。1970年代以降、インド音楽に触発されてからは、日本の音の源泉をアジア全体の文化の中で捉えるようになる。1977年に京都市立芸術大学教授に就任、のちに同大学伝統音楽研究センターを設立する。
（文責：池原舞）

柴田南雄 トリムルティ

題名の Trimurti はヒンヅー教でいう『三神一体』のことで、創造者 Brahma、保存者 Vishnu、破壊者 Siva を一体にまとめたもののことです。この際、曲はヒンヅー教とも、インドとも関係はなく、ただ上のような三位一体を端的に表わす語として Trimurti を採用したにすぎません。
曲の前半ではヴァイオリンのボウイング（弓つかい）、フルートの息づかいの種々相とそのエネルギッシュな表現がポイントで、鍵盤奏者はむしろ打楽器を多く扱います。中間部では電気的に増幅され、多少変調された各楽器（クラヴィコードを含む）の音が静かに流れます。後半に入ると《音楽の捧げもの》の終曲（第 9 曲）の無限カノンが奏されますが、それはフルート、ヴァイオリン、チェンバロのトリオのために大バッハがかなでた愛らしい挽歌にほかなりません。これをしばし追憶し、再び冒頭の曲想（今度は電気的処理をまじえ、ピアノが活躍します）が回想され、なんらかの形で曲は終ります。初演してくださる三氏と技術的な協力をたまわった諸氏に心から感謝の意を表します。
（1974 年 1 月 31 日・第一生命ホール・室内楽 '70 第 4 回演奏会、プログラムより）

柴田南雄（1916 ～ 1996）
東京帝国大学理学部を経て、同大学美術史学科を卒業。作曲を諸井三郎（1903-77）に師事。1948 年に井口基成（1908-83）らと「子供のための音楽教室」を創設する（のちに桐朋学園大学音楽学部に発展）。若い頃はロマン主義的な作風であったが、1950 年代は入野義朗と研究に励んだ 12 音技法およびミュジック・セリエルによる作品を書く。また、1957 年に設立された「二十世紀音楽研究所」のメンバーとして、20 世紀音楽を国際的な視野で紹介する活動を行う。1959 年からは東京藝術大学音楽学部楽理科で教鞭をとる。辞職後、日本民謡の採集を行い、その成果はポスト構造主義的な志向をもつ《追分節考》（1973）に結実する。
（文責：池原舞）

有馬純寿（エレクトロニクス）- ゲスト -

1965 年生まれ。エレクトロニクスやコンピュータを用いた音響表現を中心に、現代音楽、即興演奏などジャンルを横断する活動を展開。ソリストや室内アンサンブルのメンバーとして多くの国内外の現代音楽祭に参加し、300 を超える作品の音響技術や演奏を手がけ高い評価を得ている。東京シンフォニエッタのメンバーとして第 10 回佐治敬三賞を受賞したほか、平成 24 年度第 63 回芸術選奨文部科学大臣新人賞芸術振興部門を受賞。現代音楽アンサンブル「東京現音計画」メンバー。現在、帝塚山学院大学人間科学部准教授。

[楽器協力] ルドルフ・シュタイナー芸術アカデミー、アンサンブル・ノマド、甲斐史子氏、會田瑞樹氏

入野義朗 H.R.S. のためのトリオ '70

今年の何月であったか、まだはじめの頃だったと思う。野口君からの電話で、若杉、植木君とトリオのグループを作り、新しいトリオ・ソナタの伝統を作りたい、という希望と共に私に新作をたのみたい、というお話があった。私も年来の友人三人のことでもあり、早速おひきうけした。そこでこの曲の名前は若杉、野口、植木の名前（弘、龍、三郎）の頭字をとってつけた。
このHRSの順序は曲の最初に三つの楽器があらわれる順番によってつけてある。それは第一楽章であるが、はじめはチェンバロの全くのソロではじまる。しばらくの後、舞台裏からフリュートの音がきこえる。フリュート奏者が舞台にあらわれる頃になるとヴァイオリンが舞台裏からきこえ、やがて奏者があらわれるのである。こうして三人の奏者が紹介されて曲がはじまる。第一楽章はプレリュードでかなり自由な気分であるが、拍節の自由な部分とはっきり規定されている部分とが交替して一つの形式感を作り出している。第二楽章はアンプロンプチュで三つの楽器は非常に自由な立場で会話をかわす。第三楽章アリアは三つの楽章の中で最も拍節的に規正されていて三つの楽器は互に自分の歌を歌いながらアンサンブルを作りあげてゆく。
（1970年11月22日・東京文化会館小ホール・室内楽 '70 第1回演奏会、プログラムより）

入野義朗（1921 ～ 1980）
ウラジオストク生まれ。1941年に東京帝国大学経済学部に入学し、同大学オーケストラで戸田邦雄（1915-2003）や柴田南雄と知り合う。翌年より諸井三郎に師事。1946年に柴田らと共に「新声会」を結成する。ルネ・レイボヴィッツ（1913-72）著の『シェーンベルクとその楽派』やヨーゼフ・ルーファー（1893-85）著の『12音による作曲』の翻訳などを通じ、日本への12音技法導入に貢献した。自身も12音技法を用いた作品を多数発表。《7楽器のための室内協奏曲》（1951）は、公には日本初の12音技法作品として位置付けられている。1970年代以降は12音音楽から距離を置き、演劇的要素との結合なども試みる。
（文責：池原舞）

渡辺俊哉 流跡線（委嘱新作）

私達の日常はふだんは何気ないことの連続だが、そうした何気ない日常の日々の記憶が蓄積されていくことで、初めて時間の経過を認識しているように思う。この曲の時間の推移も、そうした記憶の集積によって形作られている。それらの記憶は少しずつ微妙に表情を変え、時間の経過とともに浮かび、また消えていく。時間の推移の仕方は基本的にゆるやかなものだが、時には急激にうつろっていく。また、フルート、ヴァイオリン、ピアノの３つの楽器は非常に緊密な関連性を持っており、それぞれがよく聴き合っていくことでアンサンブルが成り立つような書き方になっている。この３つの楽器に備わる多彩な音色と、そのことによって生まれる質感の違いが、曲に遠近感と陰影を与えている。

渡辺俊哉（1974 ～）
東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。同大学大学院修士課程作曲専攻修了。学部在学中、学内にて安宅賞受賞。1999年度武満徹作曲賞第３位入賞（審査員：ルチアーノ・ベリオ）。第22回日本交響楽振興財団奨励賞受賞。第24回入野賞佳作（室内楽）。武生作曲賞2003入選。第14回芥川作曲賞ノミネート。「クロノイ・プロトイ第５回作品展～弦楽四重奏の可能性」（プロデュース：渡辺俊哉）において、第９回佐治敬三賞受賞。第１回武生国際作曲ワークショップに招待作曲家として参加。翌年、武生との交換留学生として、フランスのロワイヨモン Voix Nouvelles に招待される。作品は国内外で演奏され、ミュージック・フロム・ジャパン (2012)、タンブッコ・パーカッション・アンサンブルや、個人などから委嘱を受けている。作曲グループ、Chronoi Protoi、PATH のメンバー。現在、国立音楽大学准教授、東京藝術大学講師。

八村義夫 エリキサ

≪エリキサ≫（ELIXIR [ilíksə]）とは“化金水”の意味、金属を金に変えるために、昔錬金術師が調合した液体のことである。本年1月に作曲。切り立つようなヴィルティオーゾ的ソロの集積としてのミクロの文脈をとおして、主情的な、そして個人的で内密なメッセージが伝わることを意図した。4曲で一応完結するはずの一つの作品のうちの、第2曲である（第1曲は昨年作曲した≪空中キャッチ≫（CATCH――in the air――））。
（1974年1月31日・第一生命ホール・室内楽'70第4回演奏会、プログラムより）

八村義夫（1938～1985）
9歳頃よりヴァイオリンを習い、桐朋の「子供のための音楽教室」に入室。その後、松本民之助（1914-2004）にピアノと作曲を学ぶ。東京都立駒場高校芸術科を経て、1956年に東京藝術大学作曲科に入学。作曲家を志すきっかけとなったのは、アーノルド・シェーンベルク（1874-1951）等の表現主義の音楽であった。また、シルヴァーノ・ブソッティ（1931-）からも多大な影響を受けており、その沈黙による表現や澄み切った音響空間は、八村の作品における緊張感や透明度に通じるところがある。一方で、音の強度や密度の突発的な変化をしばしば伴うのも八村作品の特徴の一つである。代表作は《錯乱の論理》（1974-75, 79改訂）。
（文責：池原舞）

野田暉行 バラード

1978年「室内楽'70」の委嘱により作曲。同年暮、野口龍、植木三郎、松谷翠各氏により初演された。この曲は、前年に完成、初演されたピアノ協奏曲の作曲中に発想されたが、2曲は、以降私の命題となる「音自体が指向性を誘発し構成、完結する即興」のきっかけとなった。
曲は突如静から動へ沸き上がり開始するが、全曲に亘って触発的に揺れ動く。その集中は様式や操作に関わるものではなく、過ぎゆく一篇の詩（バラード）と言うべきものである。度々演奏されてきたが、一つ印象的に思い出すのは、安良岡章夫君がロンドンでたまたま居合わせた演奏会の会場録音を聴かせてくれた時のこと。彼らが何の作者の示唆もなくその意図を実現していたことである。
今回新しい世代の方々が遺産を受け継いで再び世に問うことは素晴らしいことだ。時代はそのように積み重ねられていくのだろう。

野田暉行（1940～）
東京芸術大学大学院修了。在学中より、大原美術館記念委嘱、日本フィルシリーズ等で活動。その後、多数の委嘱、個展、内外音楽祭など。卒業後から定年(2007)まで同大学で教育に関わる傍ら、「21世紀音楽の会」結成により若い人達の紹介に努めている。2つの交響曲、コラール交響曲、ピアノ協奏曲、ギター協奏曲、弦楽四重奏曲、能《高山右近》、室内楽、独奏曲、合唱曲等、作品多数。現在、東京芸術大学名誉教授。交響曲第1番，第2番、コラール交響曲、ピアノ協奏曲、ギター協奏曲、弦楽四重奏曲、エクローグ、庭園にて、オードカプリシャス、死者の書、晋我追悼曲、能《高山右近》等、各ジャンル作品多数。

Member's Profile

野口 龍 のぐち りゅう (フルート)

桐朋学園短期大学音楽科在学中に ABC 交響楽団入団。後に日本フィルハーモニー交響楽団入団。読売日本交響楽団入団。1970 年「室内楽 '70」結成。読売日本交響楽団を退団以後、独奏や室内楽に活発な活動を続けている。ことに現代音楽の分野において活躍は目覚しく、その実力は国際的レベルと評価されている。近年では、2002 年より 2006 年まで「日本の室内楽・日本のフルート作品」2 本立てのシリーズを企画、制作。特にシリーズ最後のリサイタルは、深い感銘を与えた演奏会として、各方面から絶賛を呼んだ。現在、桐朋学園芸術短期大学特別招聘教授、上野学園大学客員教授。「東京フルートアンサンブル・アカデミー」メンバー。2002 年第 11 回朝日現代音楽賞受賞。

永井由比 ながい ゆい (フルート)

桐朋学園大学短期大学部卒業、同専攻科、研究生修了。 現代音楽コンクール競楽、東京音楽コンクール等に入賞。 これまでに、ISCM 国際現代音楽祭、東京室内歌劇場でのロシア公演、サントリーサマーフェスティバルでの出演など現代音楽分野で活発に活動する他、子供たちへの音楽ワークショップやアウトリーチ活動などもライフワークとしており、これまでに、学校、養護施設などでのアウトリーチ、子供対象のワークショップの公演は 400 回を越えている。(財) 地域創造公共ホール音楽活性化事業登録アーティスト。 桐朋学園芸術短期大学常勤講師。ムラマツフルートレッスンセンター講師。

三瀬俊吾 みせ しゅんご (ヴァイオリン)

東京音楽大学卒業後、桐朋学園大学院大学修了。篠崎功子、藤原浜雄、岡山潔の各氏に師事。第 1 回横浜国際音楽コンクール弦楽器一般部門第 1 位 (2 位なし)。同コンクールより奨学金を得、パリ・エコール・ノルマル音楽院へ留学。第 6 級研修課程及び室内楽のディプロムを取得。同音楽院にて、ドゥヴィ・エルリ、原田幸一郎の両氏に師事し、マスタークラスや音楽院内での演奏会などに出演。定期的に千々岩英一氏の指導も受け、パリでソロや室内楽、新作の演奏活動も行う。日本では「第 1 回室内楽 - ＯＴＯ - 三瀬俊吾のヴァイオリンとともに」に出演し 7 作品の新作を演奏。2010 年帰国。各地でリサイタルを行う他、2010 年には世界中の現代作品を紹介している「mmm...」を結成。同グループの東日本大震災義援音楽配信プロジェクト「ヒバリ」では国内外から現代音楽 100 作品を録音、ネット配信した。2011 年には古典落語と現代音楽を取り上げた「淡座」を結成。現在はソロや室内楽やオーケストラなど幅広く活動中。

大須賀かおり おおすが かおり (ピアノ)

桐朋学園大学音楽学部卒業、同大学アンサンブルディプロマコース修了。日本室内楽コンクール第 2 位。2001 年、デュオ「ROSCO」を甲斐史子 (Vn) と結成、第 5 回現代音楽演奏コンクール競楽 V 優勝、第 12 回朝日現代音楽賞受賞、2003 年度青山バロックザール賞受賞、2013 年よりコンサートシリーズ ROSCO's Atelier を開始。これまでに北京国家交響楽団との共演、韓国大邱国際音楽祭等多数出演の他、桐朋学園大学、国立音楽大学、北京中央音楽院、上海音楽学院でのレクチャーコンサート等幅広く活動。2010 年、世界の作曲家を紹介する現代音楽アンサンブル「mmm...」結成、東日本大震災義援音配信プロジェクト・ヒバリを通して世界から 100 人の現代音楽作品を録音、配信。 2012 年、知られざる歌や子供のための歌を紹介する「KOHAKU」、及び室内楽 '70 の全委嘱作品を再演する「リレーション '70 」を結成。 世界初演、日本初演数は 200 曲を超える。これまでに 2 枚のアルバム、楽譜集をリリース。日仏現代音楽協会会員。桐朋学園芸術短期大学、東京成徳大学・東京成徳短期大学、神奈川県立弥栄高校芸術科非常勤講師。

[公式ウェブサイト]　http://kaoriohsuga.com/